

田園都市と 城下町都市

佐藤 滋

(早稲田大学教授)

3年ほど前バーミンガムでのアーバン・モフォロジー会議の後、妻と二人で小さな車を借りてイギリスを一周した。ロンドン以外、イギリスでゆっくり時間を過ごすのはこのとき初めてで、盛りだくさんのターゲットを用意して見て回った。イギリス式の自然庭園、その原風景としての農村や湖水地方などの風景、そしてその風景が取り入れられた初期の住宅地などは是非とも見てその雰囲気をつかみ取りたいと考えていた。

そしてこの目的が果たせたのは何と言ってもポートサンライト住宅地であった。南イングランドからウェールズを抜けてチェスターからこの住宅地に入ると、この時代の庭園や住宅地も含めた環境や風景の思想がはつきりとそこに表現されていることが理解できた。もともと在った谷津のような線上の窪地を使って自然風景をデザインし、そこに公共施設などを接続して風景を軸としたイギリスの集落が演出されている。

アンウィンのTown Planning in Practiceなどで今世紀初頭のイギリスの田園郊外やGarden Cityが既存の集落や歴史的都心の空間ボキャブラリーを引用しているのはわかっていたし、わが国の同潤会の住宅地の設計にも影響していることも考察していた。しかしここで見たのはそのような断片的な空間言語ではなく生活空間に対する思想そのものがデザインされていたのである。都市や住宅地をデザインすることがある種の政治的意味や文化的メッセージを持った行為であることは古代都城の建設から近代の新首都建設まで変わることのない事実である。しかし、その都市建設が絶対君主や封建領主による強圧的なイメージがつきまとい、近代においては都市や住宅地のデザインに思想を表現するなどとは面と向かつては表明できないものであったのであろう。

しかし田園都市はイギリスの19世紀以来のヒューマニズムや自然主義思想を体現したものであることは間違いない。そしてこの時代に平行して起きるマッキントッシュに代表される都会派アールヌーヴォーなどとは明らかに一線を画している。デザイン思潮としてはアーツ・アンド・クラフツが原点にあるのだ

ろうが、都市空間への表現という意味では全く異なる思想表現の道をたどることになった。

このような田園都市の空間表現はヨーロッパ、アメリカそして日本にも伝わり近代建築表現、近代都市モデルとは異なる流れを形成した。「前衛」という言葉とは対極のどちらかといえば安心感はあるが若干、退屈な空間と都市をつくり上げた。デザイン的には出来の良いとされるウェルウィン田園都市にしてもその後の各地で建設された田園都市の後継者はいずれも思想を失った安穩なイメージしか受けることはできない。ポートサンライトに見られるような鮮烈な表現と比べると大きな違いに見える。

それではと訪れた、かつて前衛的現代建築デザインとしてもはやされたグラスゴー郊外のパービカン・ニュータウン・センターは完全な廃墟で、なさけない姿をさらしている。そして賑っているのはどこにでもある駐車場付きのショッピングセンターである。

私は本誌の対談の中でレッチワースが「自己革新を続けている住宅地」の例であり、ニューアーバニズムは「成功した商業主義」といったニュアンスで語っている。明確な思想から生まれた真の田園都市はいつまでも自己革新を続けて、共同で自然風景を保全創造し続けて欲しいし、ニューアーバニズムには現代のポピュリズムと市場主義を思想として表現する域に果たして欲しいものである。

日本で、言葉の持つイメージとして「田園都市」を考えるのであれば、「城下町都市」のことを参照しないわけにはいかない。たとえば新潟県の村上という城下町と田園都市を比べてみよう。山城を緑地公園とすればその周りには一戸建ての住宅地が取り囲み、その周囲を商業、生産機能さらに農地、集落、里山が取り囲んで、周囲は河川で囲われて水運も行き交い交易の中心であった。そして統合のシンボルとしての城郭や各種の意匠をこらした櫓が見通せる都市デザインがほどこされている。周囲の農山村の流通拠点でもあり、地場産業の拠点でもあった城下町はより都市的な要素が勝っていたことは間違いない。このような思想を、どのように再評価するのか、十分な検討が必要と思われる。